

～「日本で微笑むことを学びました」～

Sakura 警察官帰国研修員同窓会（インドネシア）

Sakura 警察官帰国研修員同窓会は、日本での警察研修から得た学びを広めるための組織として、2008年に設立された。2011年現在、同窓会会員は総勢約450名、インドネシア全国に会員が散らばっている。会員間のコミュニケーションは年次総会の他に、www.isiindonesia.comというホームページがある。ホームページは、主として業務に関連する会員間での情報の共有・交換を目的として立ち上げられ、現在様々なトピックに関する3000余りもの記事が会員から寄せられており、また、何か質問事項がある際に、会員全員に対して質問を投げかける場となっている。

インドネシアの警察官は、国際刑事警察機構（Interpol）の担当者を始めとして、シンガポール、中国、オランダ、ドイツなど各国から様々な研修に招へいされる機会が多い。こうした環境の下、Sakuraのメンバーが口々に語るのには、「JICAの研修が最も印象深かった」ということ

であった。その主要な要因は、45日間のJICAの研修が理論に終始せず、交番での勤務に参加することなどを通じて、実際に日本のコミュニティにおける交番を中心とした警察のあり方を体験することができたことであった。その研修期間の中で、多くのインドネシア人警察官が深い影響を受けた、と証言するのがコミュニティ・ベースの犯罪抑制・取締りアプローチである。つまり、日本では、警察官が交番制度を通じて市民と密接な関係を持っており、交番と市民との繋がりが緊密であるために情報が警察に報告されやすく、ひいては潜在的な犯罪の抑制にもつながっている、というのである。

中でもインドネシア人の警官にとって、日本の交番のお巡りさんが市民に非常に親しみをもたれており、常に微笑をたたえて市民と接している、という事実が、かなりの衝撃を受ける体験であったようだ。その衝撃の大きさを証明するものとして、Sakura会員数名が彼らの日本での体験を本で著したことを挙げることができよう。題して日本での「微笑みの学び（Belager senyun di Jepang）」。

インドネシアでは、警官は威圧的な態度をとり易く、市民からは避けられる存在であることが多い。しかし日本の交番のお巡りさんは市民に対して腰が低く、汚職行為もしない。結果として市民とのつながりを強く持つことでコミュニティにおける警察機能を高めている。このような日本で学んだ警官の「態度」をインドネシアに帰国後実践することによって、全く異なる市民との関わりが持てるようになったという。そう

言って見せてくれた満面の笑顔の背景に、研修を通じて築いた日本の警官との友情がある。



SAKURA 警察同窓会メンバー



SAKURA 警察同窓会メンバー